

# JICA's world

JUNE 2009 No.09

06



特集

# 希望と発展の地—メコン

春

夏

秋

冬

9

6月24日 インティライミ

# インカの繁栄を祈る 太陽の祭り



アンデスの山々に囲まれた町クスコは、かつて南米大陸に栄えた巨大なインカ帝国の首都だった。そのクスコでは、南半球の冬至を迎えて間もない6月24日、盛大なインティライミが行われる。

インティとはインカ帝国の共通語(ケチュア語)で「太陽」、ライミは「祭り」という意味だ。この日のためにインカ帝国全土から集まってきた人々は、鮮やかな民族衣装を身にまとい、各地の特産物を持って皇帝の前に参じる。「太陽の子」とたたえられたインカ皇帝は、この年の収穫に感謝し、次の年の豊作を願って民とともに祝う。太陽が地球から離れ、最も日が短くなるこの時期、太陽の神を惜しむかのように。

みこしに乗ったインカ皇帝がブラヨック(金のつえ)を手に登場すると、周囲から歓声が沸き上がる。そして皇帝の指揮のもと、神官たちが聖なるトウモロコシの地酒を大地に注ぎ、神の言葉が宿るココアの葉で運勢を占う。生きたリヤマの心臓を太陽の神に捧げるといふ儀式がクライマックスを迎えると、山の民は大地を轟かすように激しく踊り出す。

インティライミは、一年の区切りを付けるインカの大切な祭りとして、今日まで続いている。

## Contents

02 春夏秋冬 インカの繁栄を祈る太陽の祭り

## 04 特集 希望と発展の地—メコン

魅力あふれるメコン

成長するメコン

メコンの発展を導く地域の統合を メコン

より魅力的な投資先となる日を目指して カンボジア

メコン地域の成長を担う人材育成を メコン



18 PLAYERS 村の女性とともに無農薬野菜に願いを込めて 国際ボランティアセンター山形

20 地域と世界のきずな 大輪のバラをラオスで咲かせよう 愛知県田原市

22 地球号の子どもたち 淡路島からミャンマーの高校生へ

24 ココロとココロ  
～届け 私たちの思い～ 地雷が埋められた地域を救う村落開発を

## 26 特別レポート 北澤豪さん Bangladeshの人々の “パワー”に触れる



28 JICA に聞きたい! 青年海外協力隊員は途上国での活動を終えた後、  
どのような進路を歩んでいるの?

29 JICA UPDATE

30 イチオシ!

## 31 地球ギャラリー ザンビア コンパウンドの 「隣人力」



39 MONO語り エジプトの香りを日本の食卓へ

40 MY ACTION 佐々木恭子 フジテレビアナウンサー



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

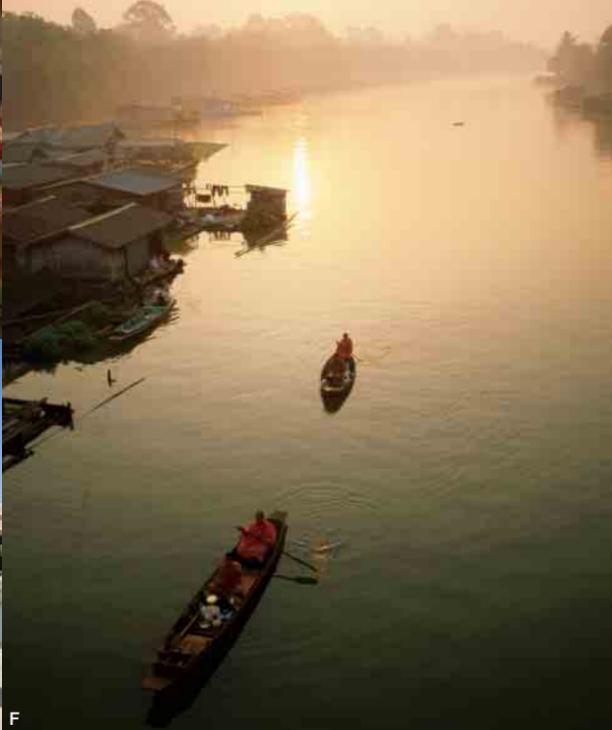
Inclusive and Dynamic Development

表紙 撮影:久野真一

ラオス・サバナケットのメコン川の夕暮れ。  
川岸で、涼を求めて人々が水浴びを楽し  
んでいた。円借款で建てられた第2メコン  
国際橋が背後にそびえ立つ



A. メコン川で捕れるなまずの一種バンガシスは人々の貴重なタンパク源  
 B. 寺院のそばでお供え用の花を売る女性（ラオス）  
 C. 日本でも有名なタイのトムヤムクン ©Tim Hill/Alamy/PPS  
 D. ミャンマーの女性 ©J Marshall/Alamy/PPS  
 E. プンベンの中央市場には新鮮な魚や野菜が並ぶ  
 F. メコン川の夕暮れ（タイ） ©Superstock/PPS  
 G. メコンの人々も食事ではしを使う ©Grant Rooney/Alamy/PPS  
 H. 浴衣を着たベトナムの女の子。ホイアン祭りでは日本との交流イベントが開かれた  
 I. カンボジアの世界遺産アンコール遺跡



雄大なメコン川流域に位置する  
 カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオス。  
 このメコン地域は、まだまだ私たちが知らない魅力であふれている。

悠久の歴史を今日に伝える数々の遺産に出会えるのも、メコン地域の魅力。中でも有名なのは、カンボジアのアンコール遺跡、タイの古都アユタヤ、ラオスの古都ルアンパバーン、ベトナムの古都ホイアンなどに代表される世界遺産だ。世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガンも美しい。日本から飛行機でわずか約6時間のタイには、年間100万人以上の日本人が訪れている。

食もまた、この地域の魅力の一つだ。タイのトムヤムクン、ラオスのラープ（ひき肉の香草いため）、カンボジアのクイティウ（コメ麺のスープ）、ベトナムのフォー、ミャンマーのモヒンガー（麺料理）などが各国を代表する料理で、日本人の口にもよく合うものが多い。

メコン地域と日本には共通点も。主食がコメであり、はしを使って食事をする。また、同じ仏教国として、交流の歴史も長い。特に近年は、政治対話、経済・文化、観光など幅広い分野でヒトとモノの行き来が活発だ。そして「日メコン交流年」である今年2009年は、各地でメコン地域と日本の交流をこれまで以上に深めるための取り組みが行われている。

悠久の歴史を今日に伝える数々の遺産に出会えるのも、メコン地域の魅力。中でも有名なのは、カンボジアのアンコール遺跡、タイの古都アユタヤ、ラオスの古都ルアンパバーン、ベトナムの古都ホイアンなどに代表される世界遺産だ。世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガンも美しい。日本から飛行機でわずか約6時間のタイには、年間100万人以上の日本人が訪れている。

### 秘められた可能性



特集  
 希望と発展の地—メコン

# 魅力あふれるメコン

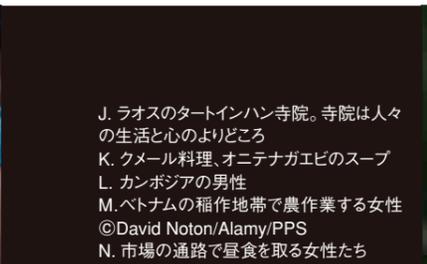
## 命の恵みをもたらすメコン

中国雲南省から、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムに伸びるメコン川。全長4800キロにも及ぶ母なる大河は、いつの時代もここを訪れる者を魅了し、この地に生きる人々にたくさんの「命の恵み」をもたらしてきた。

メコンの名の由来は諸説ある。一説によると、「メー」はタイ語やカンボジア語で「母」を、「コン」は「水」を意味し、日本語にすると「母なる川」。正しい発音は「メーコン」という。

メコン川流域にあり、総面積が約200万平方キロという広大な大地が広がるメコン地域には、約2億2000万人に上る多様な民族が共生する。そうした人々がメコン川から受けてきた恩恵は計り知れない。川は、豊かな自然をはぐくむだけでなく、産業を生み、エネルギーを作り出す源。また、この川に生息する魚は貴重なタンパク源であるとともに、下流に広がる肥沃な大地では、主食となるコメの生産が盛んに行われている。

そして、川に対する人々の敬意の表れなのだろう。どの国でも、川からの恵みを無駄なく活用する昔ながらの知恵が息づく。例えば、メコン地域の食堂や屋台に必ずといっていいほど置いてある魚醤。魚やイカなどの魚介類を発酵させた調味料で、主食のコメにも合い、地元の料理には欠かせない。



J. ラオスのタートインハン寺院。寺院は人々の生活と心のよりどころ  
 K. クメール料理、オニテナガエビのスープ  
 L. カンボジアの男性  
 M. ベトナムの稲作地帯で農作業する女性 ©David Noton/Alamy/PPS  
 N. 市場の通路で昼食を取る女性たち  
 O. ラオスの女の子 ©Paul Strawson/Alamy/PPS  
 P. 世界遺産の町、ベトナムのホイアンに並ぶランタン  
 Q. 世界三大仏教遺跡の一つ、ミャンマーのバガン ©R.Matina/AGE/PPS

撮影：久野真一（B.H.J.P）  
 今村健志朗（A.E.I.K.L.N）

## カンボジア

首都：プノンペン  
面積：18.1万km<sup>2</sup> (日本の約2分の1弱)  
人口：1,340万人  
公用語：カンボジア語  
宗教：仏教  
主要産業：観光・サービス、農業、鉱工業  
通貨：リエル  
経済成長率：10.2% (2007年)  
主要貿易品目：(1) 輸出 縫製品、生地、天然ゴム・ゴム製品  
(2) 輸入 生地類、石油製品、家電製品、車輻部品

## タイ

首都：バンコク  
面積：51.4万km<sup>2</sup> (日本の約1.4倍)  
人口：6,304万人  
公用語：タイ語  
宗教：仏教  
主要産業：農業、製造業  
通貨：バーツ  
経済成長率：4.8% (2007年)  
主要貿易品目：(1) 輸出 コンピューター、自動車・部品、集積回路、天然ゴム  
(2) 輸入 原油、機械・部品、電気機械・部品、化学製品

## ベトナム

首都：ハノイ  
面積：33万km<sup>2</sup> (日本の約0.9倍)  
人口：8,616万人  
公用語：ベトナム語  
宗教：仏教  
主要産業：農林水産業、鉱業、軽工業  
通貨：ドン  
経済成長率：8.5% (2007年)  
主要貿易品目：(1) 輸出 原油、縫製品、履物、水産物など  
(2) 輸入 機械機器 (同部品)、石油製品、鉄鋼、布など

## ミャンマー

首都：ネーピードー  
面積：68万km<sup>2</sup> (日本の約1.8倍)  
人口：5,322万人  
公用語：ミャンマー語  
宗教：仏教  
主要産業：農業  
通貨：チャット  
経済成長率：12.7% (2006年)  
主要貿易品目：(1) 輸出 天然ガス、チーク、豆類、米、エビ  
(2) 輸入 機械類、金属・工業製品、原油、電気機械、紙類

## ラオス

首都：ビエンチャン  
面積：24万km<sup>2</sup> (日本の約0.6倍)  
人口：580万人  
公用語：ラオス語  
宗教：仏教  
主要産業：農業、工業、林業、鉱業、水力発電  
通貨：キープ  
経済成長率：7.5% (2007年)  
主要貿易品目：(1) 輸出 衣料品、金・鉱物、電力、木材製品  
(2) 輸入 燃料、工業製品、衣料用原料

(参考) 外務省ホームページ、JICAホームページなど

## [メコン地域の経済成長を支える主要なインフラとJICAの支援]

※インフラの整備・建設に関する開発調査は除く。

バングラデシュ

**東西経済回廊**  
ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナムを結ぶルート。太平洋とインド洋を陸路で結ぶことにより、4カ国間の物流のオペレーションが効率化。  
>>> 事例はP10へ

**ヤンゴン国際空港**  
(円借款)  
旧首都ヤンゴンにあるミャンマー唯一の国際空港。滑走路や管制施設などはJICAの協力により整備。

**パルーチャン水力発電所**  
(円借款・無償資金協力)  
国内最大の発電所で、ヤンゴンにも送電している。長期的に安定した電力供給を目指す。

**ヤンゴン港**  
(技術協力)  
海外からの物資の輸入拠点。2008年のサイクロンで打撃を受けた同港の復旧が進んでいないため、JICAは内陸水運施設や航路の復旧計画の策定を支援中。

**ラムタコン揚水式水力発電所**  
(円借款)  
タイの電力需要とピーク負荷に対応し、バンコク首都圏の電力増強と安定化に貢献することが期待されている。

**スワンナブーム国際空港**  
(円借款)  
バンコク中心部から約30キロ、年間4,500万人の輸送が可能な東南アジアのハブ空港。24時間稼働。建設にはJICAが協力。

**レムチャバン港**  
(円借款)  
河川港で大型コンテナ船の入港が不可能だったバンコク港に代わり、JICAの協力などを経て建設された軽工業の輸出拠点。日本が建設に協力した工業団地が隣接する。

## 南北経済回廊

中国雲南省とメコン地域をつなぐルート。昆明からバンコク、ハノイを結ぶ2つのルートがある。

## メコン川

ミャンマー

ネーピードー

チェンライ

ラオス

ノンカイ

タイ

ビエンチャン

バンコク

カンボジア

シソボン

シェムリアップ

トラート

プノンペン

中国

昆明

ナムグム水力発電所

(円借款・無償資金協力)  
日本を含む世界9カ国の支援により、1971年に完成した国内最大級の水力発電所。2006年まで生産電力の一部がタイに輸出され、貴重な外貨獲得資源になった。

ナムルック水力発電所

(円借款)  
ラオス国内の電力供給の強化、タイへの輸出電力を増加させることを目的に、既存のナムグム貯水池の南東に隣接するナムルック川に建設。

ビエンチャン国際空港

(無償資金協力)  
首都ビエンチャンの郊外にあるラオスの玄関口。ターミナルなどの整備にJICAが協力。

ファーライ火力発電所

(円借款)  
首都ハノイ近郊に建設され、ベトナム北部地域の電力供給の拡大、経済活性化に貢献。

カイラン港

(円借款)  
ベトナム北部唯一の深海港で、北部の産業開発には欠かせないインフラ。JICAは港の改修に協力。

ハイフォン港

(円借款)  
首都ハノイへの物資輸送に不可欠なベトナム第2の国際港。北部物流の中心港でもある。JICAは老朽化した港の改修に協力。

ラオス国道9号線

(無償資金協力)  
ラオス中南部を横断し、タイ東部とベトナム中部をつなぐ約240kmの幹線道路。東西経済回廊の一部。

ハイヴァントンネル

(円借款)  
ベトナム中部の山岳地帯、交通の難所であったハイヴァン峠に建設された全長約6.3kmの道路トンネル。

ダナン港

(円借款)  
東西経済回廊の東の玄関港でメコン地域開発の拠点となっている。増加する貨物取扱量に対応するための港湾整備にJICAが協力。

カンボジア国道6・7号線

(無償資金協力)  
首都プノンペンからシェムリアップ、コンボンチャムにつながる幹線道路。日本により改修が進められ、道路の利便性、安全性が高まり、移動時間が大幅に短縮。

メコン架橋 (ぎずな橋)

(無償資金協力)  
メコン川により東西に分断されていた国道7号線をつなぐ橋。農作物の産地であるカンボジア東北部から首都までの往来が改善され、同地域間の物流が活発化。

第2メコン国際橋

(円借款)  
タイのムクダハンとラオスのサバナケットをつなぐ国際橋。バンコクからハノイまで、海路で約2週間かかっていた輸送時間が陸路で約3日に短縮。  
>>> 事例はP10へ

バクセー橋

(無償資金協力)  
ラオス南部の中心都市バクセーとタイにつながる国道10号線をつなぐ橋。メコン川によって阻まれていたラオス、タイ両国間の交易増大に貢献。

フーミー火力発電所

(円借款)  
商業都市ホーチミン近郊に建設され、ベトナム南部地域の電力供給の安定化、産業振興に貢献。

カイメップ・チーバイ港

(円借款・技術協力)  
ベトナム経済を牽引する港。南部経済回廊の玄関口でもある。河川港で大型船舶の入港に限界のあるサイゴン港に代わる新たな港としてJICAが建設に協力。

タンソンニャット国際空港

(円借款)  
ホーチミン郊外にあり、年間約1,000万人の旅客に対応。航空需要の増加に伴う国際線の新たなターミナル建設はJICAの協力によるもの。

シハヌークビル港

(円借款・技術協力)  
カンボジア最大の国際港。JICAはコンテナターミナルの新設と人材育成などに協力。隣接する経済特別区の整備に伴う外国投資の誘致先として期待される。  
>>> 事例はP14へ

マレーシア

## 南部経済回廊

バンコクからプノンペン、ホーチミンを結ぶルート。主要都市間の移動が容易になることで、域内での経済効果の拡大が期待されている。

マブタプット港

(円借款)  
港湾と工業団地が整備されたマブタプット地区は、シャム湾で開発された天然ガスを利用した重化学工業拠点でタイ随一の石油化学基盤。工業港と工業団地などの建設にJICAが協力。



特集  
希望と発展の地—メコン

# 成長する メコン

天然資源と豊かな自然を有するメコン川流域の国々は、近年、急速な経済成長を遂げている。今後、この地域が持続的に発展していくためには、どのような支援が求められるのか。

編集協力：廣畑伸雄・山口大学大学院技術経営研究科准教授

一人当たりのGDP (国内総生産)

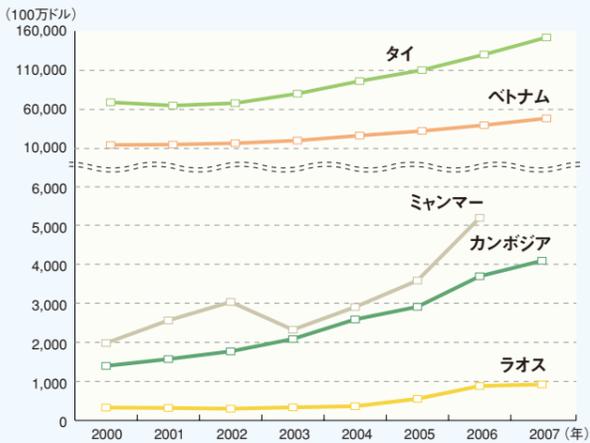
	2000年	2007年
タイ	2,023	3,841
カンボジア	287	598
ラオス	332	711
ミャンマー	159	379
ベトナム	394	815

(単位:ドル)

- A. 高層ビルが立ち並ぶタイの首都バンコク
- B. 都市化が進むミャンマーの旧首都ヤンゴン
- C. 国内および輸出用電力の生産増を目的に建設されたラオスのナムルック水力発電所
- D. 経済発展とともに車の数が増加し、渋滞も多いカンボジアの首都プノンペン



メコン地域の貿易輸出額の推移



メコン地域への直接投資額の推移



(参考) Key Indicators for Asia and the Pacific 2008 (2008), Asian Development Bank/UN data (<http://data.un.org/>)

可欠な存在となつているといえる。その意味でも、「日本がメコン地域を支援することの重要性は高い」と廣畑さんは言う。

日本は07年1月、日・メコン外相会議で「日本・メコン地域パートナーシップ・プログラム」を発表。①地域経済の統合と連携の促進、②日本とメコン地域との貿易・投資の拡大、③価値観の共有と地域共通の課題への取り組みを三本柱とし、メコン地域のさらなる発展に向けた支援を強化する方針を打ち出した。

中でも力を入れているのが、カンボジア、ラオス、ベトナムの国境の山岳地帯にある「開発の三角地帯」への支援だ。この一帯は、貧困度が高い少数民族が多く居住し、東南アジアの中でも最も開発が遅れている地域の一つ。日本は、投資の誘致や観光開発の推進を視野に入れつつも、まずはメコン地域共通の課題である域内格差の是正を目指し、ベシシック・ヒューマン・ニーズを中心とした支援を行っている。

またメコン地域は、ヒト・モノ・カネが国境を越えてスムーズに移動できるよう、国際社会の支援を受けながら、国をまたいだ「経済回廊」構想の実現に向けて動き出した。一つは、東西経済回廊。ベトナムのダナンからラオス、タイを経てミャンマーのモラミヤインに続く約1450キロの道路で、第2メコン国際橋の建設(円借款)

## メコン地域のさらなる発展のために

カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオスから成るメコン地域は、貿易や投資など、活発な民間の経済活動に後押しされ、近年の経済成長率(2007年)は4.8%(タイ)〜10.2%(カンボジア)と、軒並み高い数値を記録している。

これらの中には、内戦などが原因で政情不安が続いていた国もあったが、90年代初頭になるとそれが終息に向かい、経済発展への道が開かれた。これに伴い、国際社会による支援も活発化し、92年には、メコンを一つの地域としてとらえ、域内の資源を開発・共有し、ヒトとモノの自由な流れを推進する「大メコン圏地域経済協力プログラム」がアジア開発銀行により提唱され、域内経済の発展の重要性が注目されるようになった。

そうした中、日本も「メコン地域」の成長に貢献すべく、政府開発援助(ODA)やNGOとの連携を通じ、幅広い支援を続けてきた。協力分野は、運輸・交通、市場経済化、法整備、教育・人材育成、保健・医療、防災・災害対策、水・衛生などさまざま。とりわけ、道路や橋、港、空港、発電所といった、成長を牽引する経済インフラの整備には力を入れてきた。

## 日本とのパートナーシップを強化

日本はこれまで、メコン地域5カ国を含む東南アジア諸国連合(ASEAN)と、貿易などの面で密接にかかわり合いながら、相互に政治的・経済的発展を遂げてきた。さらに近年、タイやベトナムを中心にメコン地域へ進出する日系企業が増えるとともに、経済取引の円滑化を図るための経済連携協定や投資協定が次々に結ばれている。つまり、これまで以上にメコンとの経済関係が密接になり、日本にとって不

一方で、域内格差の是正という課題がまだ横たわる。07年の一人当たりGDP(国内総生産)を比較すると、中進国に仲間入りしたタイ(3841ドル)に対して、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナムはいずれも1000ドル以下。その差は、年々縮まってはいるものの、まだまだ大きく開いている。また、一国内で見ても、着実に発展する都市部に対して、農村部では多くの貧困層が存在するのが現状だ。

廣畑伸雄・山口大学大学院技術経営研究科准教授は、「メコン地域には、未開発の天然資源や自然など、持続的な成長を促すポテンシャルが十分にあり、それをいかに効果的に開発し、経済成長につなげていくかが今後の課題です」と話す。

「今後は、インフラなどのハードはもちろん、産業人材の育成などソフトの支援との相乗効果がより重要になります。さらに、これまでは独立した経営を考えていたタイとベトナムの工場間の垂直分業、企業間の連携などによるトータルコスト削減が実現できる可能性もあり、新たな国際経営戦略の創出による回廊の一層の活用が期待されます」と廣畑さんは展望を述べる。

成長するメコン地域のさらなる発展を支えるため、JICAはソフトとハードの両面から多角的な支援に取り組んでいく。

※衣食住、初等教育、医療衛生など、人間が生きていくために必要とされる基本的な生活基盤。

2006年12月に完成した第2メコン国際橋は、JICAが詳細設計調査を行い、その後、建設のための円借款が供与された。これによりベトナムからミャンマーまで、インドシナ半島を東西に横断する約1450キロの「東西経済回廊」がほぼ開通。以前は海上ルートで約2週間を費やしたタイ・バンコク、ベトナム・ハノイ間の物流が、

陸路で約3日にまで短縮された。入国管理事務所では、到着したシャトルバスから大きな荷物を抱えた旅行者がどっと降りてくる。入国審査の担当職員によると、ここでの出入国は1日に1000人を超えるという。すでに1日20便以上のシャトルバスが両国を行き来しており、乗客は、最近サバナケットにオープンした商業施設目当てのタイ人観光客、出稼ぎや商品の仕入れなどでタイに渡るラオス人らが中心だ。

肌を焦がすような日差しが厳しい4月中旬、タイ東部・ムクダハンから、ラオス中部・サバナケットに向かうため、メコン川に架かる「第2メコン国際橋」を渡った。眼下に望むメコン川の川面に、照りつける太陽がキラキラと輝いている。橋の全長は約1600メートル。大型トラックやタンクローリー、大勢の客を乗せた国際シャトルバスが、眺望を楽しみながら、合掌した手の形を連想させる。橋を吊り上げる2本の巨大な支柱を通り過ぎると、程なくラオス側の入国管理事務所に着した。

東西回廊の開通に伴い、サバナケットでは、その経済効果を見据えたさまざまな取り組みが始まっている。その一つが、JICAの提案に基づき、サバナケット近郊の3つのエリアで進む経済特別区の整備だ。ようやく整地が始められた場所も多く、本格的な稼働はこれからだが、優遇政策による国内外からの投資の呼び込みを力を入れ、一部ではすでに企業が集まり操業を始めている。今後、大規模な工場や倉庫、貨物のターミナルのほか、ホテルや住宅などが建設される予定で、現地の雇用拡大にもつながるものと期待されている。

貨物を積んだ大型トラックが、タイ・ムクダハンから第2メコン国際橋に入り、対岸のラオス・サバナケットを目指す。タイ側の出国審査を終えると、左側通行(タイ)から右側通行(ラオス)へと車線が変更される

### 国際橋の完成と 東西回廊開通を呼び水に 地域経済の活性化を図る

近年、成長著しいメコン地域では、道路や橋といった国境を越える交通インフラの整備が、日本の支援などによって進められている。JICAは、国境税関システムの整備などを通じて、メコン地域の発展と統合を後押しするための支援に力を入れる。ラオスとタイを訪れ、こうした協力で変わりつつある地域や人々取材した。写真：久野真一

# メコンの 発展を導く 地域の統合を



円借款としては、初めての2国間にまたがる広域インフラ整備となった第2メコン国際橋の建設。日本の企業を中心に、タイ・ラオス両国の企業や技術者が参加して工事が進められた





ノンカイ税関で、職員と税関業務の進め方を確認する宇野専門家(右から2人目)



サバナケットの観光資源を広く知ってもらうため、JICAの支援でさまざまな種類の観光パンフレットが作られた。空港やバスターミナル、ホテル、レストランなどに置かれている

「リスクが高いか、低いかの判断には、個人の過去の履歴や違法取引の傾向など、データを使った分析が重要です」。セミナーに毎回出席し、

域内の経済規模や制度面での格差など、残された課題も少なくないが、国境をまたぐ交通インフラの整備や税関業務の迅速化などにけん引され、メコン地域は経済統合に向けて力強く走り出した。そのダイナミックな変化は、今後、国際的にも大きな注目を集めそうだ。

実施など、情報発信にも力を入れている。

「JICAの支援でサバナケットの観光資源が知られるようになり、国内外からの観光客が除々に増えている」と喜ぶのは、サバナケット観光局のブーンミー・カンチボン局長。「この地域が、タイとベトナムを結ぶただの通過点になってしまっただけではない。観光振興を通じて、東西回廊を通る人々を呼び込んでいきたい」と力強く語る。

**税関業務の迅速化と違法取引の監視強化により国境での流れを円滑に**

一方、ラオスの首都ビエンチャンからタイ東北部の町ノンカイにつながる国際橋(通称「友好橋」)は、トラックやシャトルバスがひっきりなしに通り、両国の入国審査の窓口や荷物の検査場に並ぶ人々の列が続く。一角には、大型車両をそのまま透視できる巨大なX線検査装置も見える。

タイ側のノンカイ税関は、08年2月からJICAが行う「メコン地域における税関リスクマネジメントプロジェクト」のパイロットサイトの一つ。メコン地域の経済活性化のためには、国際橋のようなインフラ整備とともに、国境を越えるヒトやモノの円滑な移動がカギとなる。そのため、域内の往来がより活発になる中、通関手続きの迅速化と、違法取引を防ぐ国境での監視強化が重要な課題となっている。JICAでは、麻薬の密輸や模倣品といった違法性の高いものを確実に摘発し、同時に安全な貨物・荷物や人の越境手続きを簡素化するための「リスクマネジメント」能力の強化に取り組んでいる。タイ、カンボジア、ベトナムの3カ国の税関を対象に、職員と組織の能力向上を図り、各国での定期的な研修や、3カ国合同のセミナーなどを開催している。

去年は日本での研修にも参加したという、ノンカイ税関職員のウイスタサック・カーバンクラチャンさんは言う。「より精度の高いデータ分析の手法や、リスクの判断が難しいグレーゾーンの取り扱いなどについて、日本の事例から多くを学びました。税関業務の円滑化や時間の短縮化に大いに役立っています」と、その成果を述べる。

支援を取りまとめるのは、日本で税関の要職を長年務めた経験を持つJICA専門家の宇野悦次さん。「メコン地域の結び付きが強まり、国境の往来が増えている中で、安全なものは素早く通し、逆に社会の安定を脅かすものはしっかりと摘発していくことが必要です。JICAの支援をきっかけに、将来的には、域内共通の税関システムの構築につながれば」と期待を寄せている。

ラオス国際橋管理事務所のアラット・バハニット副所長は、「以前、ここはタイとラオスを結ぶ小さなフェリーが通るだけだったが、国際橋の完成でヒトやモノの流れは大きく変わった。今後、経済特別区への企業進出や投資が拡大すれば、往来もより活発になり、地域一帯の経済発展につながるだろう」と期待する。

また、メコン地域で物流事業を展開する日本ロジテム株式会社の杉山恵一さんは、「最近では、ラオスで採れる鉱物や、今年開業したタイ系砂糖工場などからの貨物輸送の需要が目立って増

えている」と、地域経済が大きく動き始めたことを日々実感している。同社では東西回廊の開通を受け、07年より経済特別区内に拠点を設けており、今後も回廊を利用した国際貨物の陸上輸送に力を入れていくという。

さらにJICAは、東西回廊を呼び水にした経済活性化策として、サバナケットとその周辺地域の観光振興を支援している。サバナケットには、フランス植民地時代の歴史的建造物や、由緒ある仏教寺院などがある。だが、以前は観光客の受け入れ態勢が整備されておらず、観光情

報の発信やプロモーションも十分ではなかったため、訪れる人も少なかつた。最近、利用者が急増している商業施設も、地域全体に経済的効果を波及させるまでには至っていない。

そこでJICAは、サバナケット県の観光振興計画の策定のほか、案内所やホテルといった観光客の受け入れ施設に配る観光案内マニュアルの作成などを支援してきた。また、モデルルートを示したパンフレットとポスターの作成、観光案内ウェブサイトの改善、メディアや旅行会社を対象とした体験ツアーの



バスの収納スペースを検査するウイスタサックさん。ノンカイ税関を通過する車両の数は、1カ月に約20万台



国際シャトルバスで橋を渡り、サバナケットに到着したタイ人観光客



サバナケットでタイ人観光客が入国審査を受ける。現状ではタイ出国時にも手続きが必要なことから、審査が一度で済むワンストップ・サービスの導入が現在進められている



2009年3月に開通したノンカイ〜ビエンチャンを結ぶ国際列車。友好橋を渡りラオスに入る。その利便性から、日帰りビエンチャン観光に訪れるタイ人観光客が増えている

と靴を海外へ送り出す玄関口と  
なっている。  
そんなシハヌークビル港も、  
10数年前は老朽化が著しく、急  
増が見込まれる港湾貨物への対  
応が急務となっていた。96年、  
JICAはシハヌークビル港の  
整備計画を策定するための調査  
を実施。また99年と04年に、コン  
テナ埠頭を400メートル拡張  
するとともに、大型クレーンやコ  
ンピューターシステムなどを導

入するための円借款を供与した。  
港が整備されたことで、カン  
ボジアへの進出を考えている  
企業にとっては、原材料の輸入  
や製品の輸出に対するリスクが  
一つ減ったともいえる。外国投  
資の誘致に一步前進した瞬間だ。  
しかし、港湾の整備・拡張など  
ハード面とともに、港湾の管理・  
運営を担う港湾庁職員の能力な  
どソフト面も併せて向上しなけ  
れば、増加するコンテナを効率

的にさばくことは難しい。  
そこでJICAは、円借款で  
新たに導入されたコンピューター  
システムなどの設備を使って  
ターミナル全体を効率的にオペ  
レーションするための人材育成  
に協力。現在、坂田和俊専門家  
を中心に、オペレーションの核  
となるスタッフの育成から、コ  
ンテナヤード<sup>※2</sup>のレイアウト作  
成、ヤード内でのコンテナの移  
動方法などについて指導に当た  
っている。  
日々の苦労を尋ねると、「何事  
にも時間がかかりすぎてしまう  
こと」と苦笑する坂田専門家。  
コンテナヤードのレイアウトを  
作成した時には、幾度となく議  
論が行われ、決定まで3カ月と  
いう時間を要した。そんな場合  
でも、「責任感を持って新システ  
ムを運用していきけるようになっ  
てもらうため、最終決定は港湾  
庁職員らの選択に委ねている」  
という。4月下旬からは、実際  
に新システムを使つての総合運  
転のトライアルが始まっており、  
「最初はトライアンドエラーを繰  
り返しながらかかる外国投資  
ていくことになりまます」と坂田  
専門家が話す通り、まずは基本  
的なオペレーションができるよ  
うになるのが目標だ。

ここ数年、年10%を超える経  
済成長率を維持し、政治・経済  
ともに安定した国づくりを進め  
ているカンボジア。1993年  
に憲法が制定されて以来、計画  
経済から市場経済へ移行、開発  
が急速に進められ、2004年  
には世界貿易機関(WTO)への  
加盟を果たした。外国直接投資  
も徐々に増えており、亜鉛鉄板  
の工場やオートバイの組み立て、  
自動車販売などの分野でカンボ  
ジアに進出する日本企業も見ら  
れる。また08年に「日・カンボ  
ジア投資協定」が発効され、こ  
れを機にカンボジアの投資環境  
の整備が進展するとともに、日  
系企業の投資が拡大することが  
期待されている。  
そうした状況の中で、外国投  
資の誘致先として有望視されて  
いるのが、首都プノンペンから  
車で約3時間のところにある南  
部の港町シハヌークビル。シハ  
ヌークビル港は、大型船舶・コ  
ンテナ船による貨物のほぼ全量  
を取り扱う、同国最大の国際港  
湾だ。97年の時点で7万TEU  
<sup>※1</sup>だった同港のコンテナ取扱量  
も、08年には26万TEUにま  
で増加。主要産業である縫製品



(上) 船で運ばれてきたコンテナは、クレーンでトラックに載せられ、コンテナヤードに送られる  
(左) コンテナヤードのレイアウトを決める会議で港湾庁職員にアイデアを提案する坂田専門家(奥)



シハヌークビル港の全景。JICAは2基のコンテナクレーン(左)とコンテナ埠頭(右)の整備に協力

ハードとソフトの両面から  
港湾を整備

港に隣接した  
経済特別区の建設

一方、港湾整備と同時に、経済特別区の設置も外国投資の呼び水としての期待が高い。輸出関連産業の開発に大きく貢献するとともに、近年急増する若年層の雇用機会の創出にもつながる。  
JICAは、プノンペンとシハヌークビルを結ぶ道路の周辺地域の開発計画策定などに協力。また、シハヌークビル港の隣接地区に、輸出加工区を中心とした約70ヘクタールの経済特別区を建設するための円借款を供与した。2011年の完成を目指して、現在、工場用地や道路、上水設備、下水処理設備などの整備が進められようとしている。さらに、投資家にとって魅力的な投資先となるよう、さまざまな制度設計も行われる。それに加え、電力や通信の需要拡大が予想されることから、円借款により、経済特別区までの送電線や光ケーブルも整備される予定だ。

経済特別区の完成予定地。現在、日系の中小企業2社が進出に向け準備中

※1 20フィートコンテナ1個分に換算した数量の単位。  
※2 コンテナを荷役し、一時集積しておく場所。

より魅力的な  
投資先となる日を目指して

カンボジア最大の国際外洋港、シハヌークビル港——  
この国の経済・産業の発展を支えるコンテナターミナルの稼働が始まる。  
外国投資の誘致先として有望視される港の整備とともに、経済特別区の建設などを通して、  
JICAは同国の貿易・投資拡大を支援している。



1986年から経済開放政策が進み、市場経済化をリードする人材の育成が急務となっている。

1986年から経済開放政策が進み、市場経済化をリードする人材の育成が急務となっている。

日本は2000年以降、市場経済化を進めるアジア地域の国々の人材育成拠点として、9カ国10カ所※に日本センターを設立してきた。以来、JICAはその運営を支援し、起業家や若手行政官、学生など各国の未来を担う人々に、経営、生産管理、マーケティング、情報技術といったビジネススキルや日本式の経営ノウハウを伝える講座やセミナー、ワークショップなどを実施している。

**日本と各国の共有財産として**

またJICAは、ラオスに加え、カンボジアやベトナムでも日本センターの運営を支援している。約20年に及ぶ内戦で多くの知識層を失ったカンボジアの日本センターでは、経済発展を主導する民間の人材を育成する

ユーザースキル、日本語などを学ぶために集まってくる。ビジネスコースの教室では、やや緊張した面持ちの受講生約30人が、短期コース「生産管理」の開講式に臨んでいた。製造業の現場担当者らが、生産管理や生産性向上の手法について学ぶこのコース。大手電器メーカーの技術者として40年のキャリアを持つ清水剛さんがコースリーダーを務める。「失敗例も含めて、私の経験をできる限り伝えていきたい。そしてものづくりに大切な視点を学んでほしい」。清水さんの言葉に皆の表情が引き締まる。

「留学してMBAを取得するのは経済的負担が大きいため、新しくコースができたこと知り大喜びした」と話すのは、受講生の一人で、国連機関のラオス事務所に勤務するボンマリー・ピツサリーさん。「日本の講師陣によるレベルの高い講義も受けることができ、充実している」と満足そうだ。

ため、ビジネス実務だけでなく、中小企業の経営診断や製造業の企業を対象とした現場指導などにも力を入れている。またベトナムでは、首都ハノイとホーチミンの2大都市に日本センターが置かれ、日本式の生産・品質管理方法といった実践的な知識やノウハウを、地元企業での現場指導や日本での実地研修などを通じて伝えている。

運営費を全額負担していたが、自己収入の機会を増やすなどして、今ではその割合が半々になった。将来的にラオス側が自立して運営できるようにしたい」と先を見据えている。

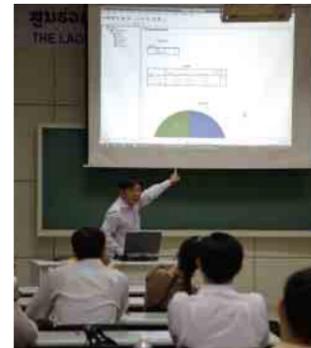
ラオス日本センターの玄関前には、「両国の共有財産として育ててほしい」との願いを込めて設立時に植えられた一本の木がある。小さくとも力強いこの幼木の成長とともに、メコン地域各国の伸びやかな発展が、日本センターから生まれる多くの優秀な人材によってもたらされることを願う。

※ウクライナ、ウズベキスタン、カザフスタン、カンボジア、キルギス、ベトナム、モンゴル、ラオス、ミャンマー（2008年に協力を終了）。

(上) ベトナム日本センターが行う相互理解促進事業の一環で、工業用ミシンを製造する日系企業を訪問したハノイ貿易大学の学生たち  
(下) カンボジア日本センターで盆踊りや書道などの日本文化に触れる人々



ラオス日本センターのコンピュータールームで、パソコンスキルの向上に励む若い修行僧たち(撮影:久野真一)



(右) 現地日系企業などから寄せられる求人情報も随時更新されている。「日本センターに集う人々は日本への関心が高いため、日系企業からも人気がある」と佐藤所長  
(中) ラオス日本センターには、蔵書数1万冊を超える図書館が一般に開放されているほか、茶室や日本庭園なども併設されている  
(左) 約100人の応募の中から選ばれた35人の受講生が学ぶラオス日本センターのMBAコース。国内のニーズの高まりもあり、コースの規模も徐々に拡大される予定だ(撮影:久野真一)

# メコン地域の成長を担う人材育成を

かつて社会主義体制下にあったメコン地域の国々では、市場経済化の進展をリードする人材の確保が求められている。JICAは、日本人材開発センター（通称:日本センター）を拠点に、ビジネススキルや経営ノウハウなどを伝える人材育成に力を入れている。

**ラオス初のMBAコースを開設**

ラオスの首都、ビエンチャン郊外にあるラオス国立大学のキャンパス。その一角に立つラオス日本人材開発センター（通称:ラオス日本センター）は、毎日夕方になるとにわかに活気づく。大学生や制服姿の高校生、仕事を終えた社会人といった多くの人々がビジネスや経営、コンピ





(上) 家庭菜園を持つ女性たちは、定期的に会合を開き、野菜の栽培方法などについて議論する  
(下) ホテルに出荷する野菜をトラックに積み込んでいく

の仕事を担うのは女性たち。しかし、農業に関するノウハウが不足し、世帯間の連携が取れていないことなどから、自分たちが消費するコメの自給さえ厳しいのが現状だ。

そこでIVYは、地域開発の主体を女性に置き、村の女性同士のコミュニケーションを活発化するため「女性組合」の設立を提案。IVY事務局長の安達三千代さんは「ボル・ポト時代は、密告を奨励する風習がありました。その後遺症で人々は疑心暗鬼となり、共同体が破壊され、隣のひとと話さえたことない人もいたぐらい。ましてや、女性同士が協力して何かをするという意識は、ほとんどありませんで

した」と話す。

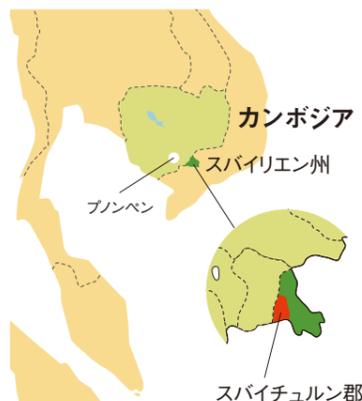
しかし、次第に、女性組合の輪が各村に広がり始めた。「今では定期的にワークショップや勉強会を開き、村の発展のため、何ができるかをみんなで考えています」。村の選挙で選ばれたメンバーが中心となり、米銀行や家畜銀行、行事での食器の貸し出し、小学校建設まで、女性ならではの視点でさまざまな村づくりに取り組んでいる。

**野菜の共同出荷を通して村の発展を**

女性組合の活動が活発化するにつれて、村がより活気づくためには、やはり持続的な収入源が必要という問題意識

各家庭から集めた野菜は、女性組合の野菜販売員が村外の市場に自転車で売りに行く。安達さんは、「今は、需要に供給が追い付いていない状態。輸入野菜は危険と考える人も多く、少し高くても、無農薬野菜は人気が高い。トマトやニンジンなど、需要の高いほかの野菜の栽培にも挑戦していきたい」と意欲を語る。

昨年2月、現地プロジェクトマネージャーの松浦あゆみさんは、女性組合のメンバー12人を引き連れて、首都プノンベンに視察旅行へ。市内の市場やスーパーマーケットの見学、JICAカンボジア事務所や現地NGOで野



識が生まれた。そこで2007年から、JICA東北の草の根技術協力を通じて、女性組合を活用した農業振興に取り組みことに。各家庭の菜園で、無農薬野菜の栽培への挑戦が始まった。

各村を回りながら、種の入手、苗床やたい肥の作り方から、販売時のディスプレイまで、IVYのスタッフはきめ細やかに指導を続ける。「売れる」ためには、野菜が一番おいしい時期を、サイズや色で見分けて出荷することが重要です」と安達さん。さらに、長ささげ豆なら同じサイズのを束ねたり、サニーレタスなら竹かごに盛って「みずみずしさ」を強調するため霧吹きで水をかけたり……。さまざまな工夫を凝らしている。

各家庭から集めた野菜は、女性組合の野菜販売員が村外の市場に自転車で売りに行く。安達さんは、「今は、需要に供給が追い付いていない状態。輸入野菜は危険と考える人も多く、少し高くても、無農薬野菜は人気が高い。トマトやニンジンなど、需要の高いほかの野菜の栽培にも挑戦していきたい」と意欲を語る。

昨年2月、現地プロジェクトマネージャーの松浦あゆみさんは、女性組合のメンバー12人を引き連れて、首都プノンベンに視察旅行へ。市内の市場やスーパーマーケットの見学、JICAカンボジア事務所や現地NGOで野

村で栽培した無農薬野菜をかごいっぱいに入れ、市場に売りに行く



## 村の女性とともに 無農薬野菜に願いを込めて

カンボジア・スバイリエン州の女性たちとともに、  
野菜の共同生産・出荷に取り組む認定NPO法人国際ボランティアセンター山形。  
村の「女性組合」の運営を通して、収入向上と農村振興を目指している。

### 女性主体の 村づくりを目指して

「村の女性が栽培した無農薬野菜はいかがですか」  
町の市場の一角で、みずみずしいキウウリや空芯菜を売る女性たち。「安全でおいしい」が売りの野菜は、少し値が張るものの、見る見るうちに売れていく。

野菜を売るのは、カンボジア南東部スバイリエン州スバイチュレン郡に住む女性たち。各村の女性で構成される「女性組合」のメンバーでもある。この日は、村の家庭菜園で栽培した野菜を集め、村外の市場に売りにやって来た。

そんな彼女たちを10年にわたり支援するのが、認定NPO法人国際ボランティアセンター山形（通称IVY）。東北地方ならではの農業のノウハウを生かし、1999年からスバイリエン州の女性のエンパワーメント（能力向上）、農業振興を通じた貧困削減を支援している。

IVYが「女性」にフォーカスした支援を行うのには理由がある。国内でも貧困層が多い同州では、男性の多くが都市に出稼ぎに行ってしまう。大半の家庭が農業を収入源とする中で、そ

業の試験販売を行った。メンバーの中には、首都に行くのはもちろん、村を出るのが初めてという人も。この経験は、大いに刺激になったようだ。

そして12月、村の女性たちに驚きのニュースが届いた。ベトナム国境地帯にある経済特別区のホテルから、彼女たちの野菜を買いたいという申し出があったのだ。第1回目は、今年2月に4つの村から200キロの野菜を集めて出荷。ホテル側も彼女たちの野菜の質を高く評価しているという。松浦さんは、「ほかの野菜と同じにされては困る。いかに無農薬野菜を良い値段で売ることが重要です」と強調する。

そしてもう一つうれしいニュースが。今年から、女性組合のメンバーだった現地の女性がIVYのスタッフとなったのだ。村の発展を担う人材が育っている証しだ。家庭菜園から生まれた野菜が、今日も彼女たちのパワーの源となっている。



プノンベン市内のスーパーを視察する女性組合のメンバー。初めて見る光景に驚きの連続だった



# 大輪のバラをラオスで咲かせよう

日本有数の花の生産地として知られる愛知県田原市。  
その栽培技術を生かしてラオスの花卉産業の活性化を後押ししようと、  
バラの栽培方法を伝えている。

【愛知県】

田原市

## 愛知県田原市

面積188.81平方キロ、人口約6万6,000人。2003年、旧赤羽根町が旧田原町に編入合併され、田原市に。05年には旧渥美町が編入合併され、現在に至る。1968年の豊川用水の通水以来、地域の農業が飛躍的に発展。野菜・花卉に代表される、全国有数の農業地帯として知られる。88年より、JICAが実施する農業分野の研修事業に協力、研修員滞在中のホームステイや交流会など、地域ぐるみの異文化交流を積極的に行う。05年の「愛・地球博」以来、ラオス・サイタニー郡との交流事業に力を入れている。

## 途上国に広がる田原の技術

愛知県の南端、渥美半島に位置する愛知県田原市。大きな河川に乏しく水不足に苦しみ、小規模ながらも農業と漁業で暮らしていたこの地域では、約40年前に豊川用水が全面的に通水し、農業の近代化・先進化に成功。国内有数の農業地帯へと生まれ変わり、今や野菜、花卉などの農業生産額は全国の市町村でトップクラスを誇る。中でもキクやバラ、カーネーションといった花卉類は、同市の全農業販売高の約半分を占める代表的な生産物だ。

そんな技術と経験を生かし、田原市ではJICAが実施する農業分野の研修を20年以上受け入れている。地元農家や農協といった地域の協力のもと、開発途上国の研修員に対し、生産技術やかんがい・排水技術などを指導している。

そして同市が今、力を入れているのが、2005年の「愛・地球博」をきっかけに交流が芽生えた国、ラオスへの国際協力だ。万博の参加各国と県内の市町村が交流を深める「一市町村一国フレンドシップ事業」によって生まれた縁で、田原市の農業技術やその高い収益性に注目したラオスが、同市に協力を依頼。田原市はJICA中部の草の根技術協力を通じ、首都ビエンチャンの郊外にあ



サイタニー郡のバラ栽培試験場で、花や茎の様子を調べるトンスックさん(左)とアヌンさん(右)。「今年の夏には市場で売り出したい」と意気込んでいる(撮影:久野真一)



る。いつか見事な花を咲かせ、田原市の温かい支援に恩返しをしたい」と話すトンスックさん。その熱意が実り、美しく咲き誇る大輪のバラの花が、市場で人気を呼ぶ日もそう遠くはないはずだ。

るサイタニー郡で、バラの栽培技術を指導することに。その一環で07年11月から、サイタニー郡農林事務所のトンスック・ボウリカーンさんとアヌン・バンダヴォンさんが、市内のバラ栽培農家で約4カ月間の栽培実習を受けた。

花が咲かなかった」と話すトンスックさん。害虫にも悩まされた。だが、田原市の栽培農家や技術者がこれまで3度にわたりサイタニー郡を訪れ、技術を指導。土壌の改良や肥料・殺虫剤の使い方、剪定作業や花摘み、水やりなどについてアドバイスし、現地の気候風土に適した栽培手法を伝えてきた。さらに、毎月トンスックさんらから送られてくる栽培経過の報告書への返信・指導も行っている。またJICAも、苗や農機具、肥料など必要な資機材面で協力してきた。

近年、ラオスでは花の需要が増えているが、寺院への参拝で供え物としてよく使われるマリゴールドを除き、大半をタイやベトナムからの輸入に頼っており、価格も割高だ。バラはホテルなどでよく使われるほか、新年や卒業式のシーズンにも需要が高くなるものの、国内ではほとんど生産されていない。農業生産力を向上させたいラオスにとって、収益性の高いバラの栽培は魅力的であり、主に稲作に依存する農家の新たな収入源としても期待されている。

バラはこの半年で2回花を咲かせたが、支援の成果もあり、今年4月に咲いた2番花は前回のものよりも出来が良く、商品化のめどが付きつつある。現在は、夏に咲く3番花の市場への出荷を目指し、これまでの教訓も生かしながら栽培に取り組んでいる。また、いずれ郡内の農家にバラ栽培を普及させるため、配布用の苗1500株を用意しているほか、初心者向けの栽培手引書も作成しているところだ。

田原市での実習を振り返り、「優れた生産性と高い技術、農家の人々の勤勉さなど多くを学んだ」と話すトンスックさんとアヌンさん。帰国後、彼らが中心となって準備を進め、08年12月からサイタニー郡農林事務所試験用農場などで試験栽培が始まっている。

「日本とは土の質や気候が異なり、設備も不十分で、初めは思うようにいかないところだ。これまで2度、現地で指導に当たってきた花卉栽培歴45年の富田政彦さんは、「よちよち歩き」の段階ではあるが、まともな農機具もなく、専門的な農業知識も乏しかった当初に比べれば、ここまで育てられたのは立派」と目を細める。



現在、ラオスの市場で売られている花の大半は、タイなどからの輸入品だ

田原市のキク農家で温室栽培を見学するJICAの研修員。「研修の受け入れは、日本の農家にとっても自らの足元を見直す良い機会」と、田原市政策推進部の三竹雅雄さんは話す

通常は、試験場に隣接するため池からJICAが供与したポンプで水を引いてくるが、時には土の乾き具合に応じて、水のやり方も異なってくる(撮影:久野真一)

※鑑賞用に栽培する植物。鑑賞する部分により、花物、葉物、実物などに分かれる。

サイクロン被災者のために  
できること

2008年5月3日、ミャンマー南部を大型サイクロン「ナルギス」が直撃した。ミャンマー史上最悪といわれたこの自然災害。町中の家屋、学校、桟橋、医療施設などは、沿岸から押し寄せた高波に一気に飲み込まれ、町は混乱状態に陥った。JICAは、ミャンマー政府の要請に基づき、3回にわたり緊急援助物資を供与。テントや毛布、給水タンクなど緊急に必要とされる物資を配布するとともに、国際緊急援助隊・医療チームの派遣を即時に決定。被害の最も大きかったラプタの避難キャンプで医療活動を実施した。

ミャンマーの被災地の惨劇は、日本でも連日のように報道された。地震、台風など、自然災害の多い日本。「人ごとではない」と、全国各地で募金活動が始まった。そして1995年の阪神・淡路大震災で被害を受けた淡路島でも、被災地の状況に心を痛める高校生の姿があった。兵庫県立淡路高等学校で「防災と心のケア」を履修する2年生(当時)20人だ。「防災と心のケア」は同校の選択科目。防災マップの作成、災害発生時の対処方法、地域の保育園での防災に関する絵本の読み聞かせなど、震

応援旗を手にし、淡路高校の生徒に手を振るラプタ第一高校の生徒たち



淡路島から  
ミャンマーの高校生へ



2008年5月にミャンマーを襲った大型サイクロン。死者・行方不明者が13万8,000人にも及ぶ未曾有の災害となった。その被災地の高校生に、海を越えて、兵庫県立淡路高等学校から励ましのメッセージが届けられた。

ミャンマーの高校生に向けて、心を込めてメッセージを作成する



災の経験を生かした内容となっている。担当の森康成先生は、「震災から14年たった今、当時の記憶がない生徒がほとんどです。授業を通して、震災を『伝え』、語り継いでいくことが目的」と話す。

募金活動、救援物資の送付など、いろいろな意見が飛び交う中で、2年生(当時)の藤本雄士さんと桜木歩一を流した。モニターを通して映し出される悲惨な映像に、言葉が失う生徒たち。授業の後、「何か僕たちにできることはないか」という声が自然に上がった。

「それなら僕たちの手でできる」と満場一致で決まった。大きな白い布に「今はつらいと思うけど頑張って」「信じていればきっといいことがある」など、一人一人の思いを書き込んだ生徒たち。そしてあつという間に、2枚の布はメッセージでいっぱいになり、縦1メートル、横2メートルの応援旗が完成した。

さんが「メッセージを書いて、応援旗にして贈ってはどうか」と提案。「それなら僕たちの手でできる」と満場一致で決まった。

海を越えて  
メッセージを届けたい

しかしその後、思わぬ事態が待っていた。災害後の混乱もあり、応援旗を現地に届けるのが難しいということが分かったのだ。約30年前、2年間かけてアフリカ大陸を旅した経験もあるという森先生は、「自分でバックパックを背負って届けに行こうかとも思った」と言う。

このままでは、せつかくの生徒の思いが台無しになってしまう。そこで森先生は、以前からJICAの研修員受け入れや開発教育支援などで縁のあったJICA兵庫に相談。その話はずいぶんJICAミャンマー事務所に伝わり、何としてでもJICAがメッセージを届けることを約束。同事務所の平野潤一職員が「メッセ

ンジャー」となり、淡路高校の生徒たちの思いを直接現地に届けることになった。

応援旗が完成してから約半年後の2月、平野職員は、被災地への復興支援の一環として支援が検討されている、小学校、サイクロンシェルターの建設計画のためにラプタを訪問した。そして、村落調査の合間にラプタ第一高校を訪れ、ついに淡路高校の生徒たちの作成した応援旗が届けられた。同校には、サイクロンによって家や家族を失った生徒もたくさんいる。しかし、遠く離れた日本の高校生からの応援旗を手にした彼らの顔は、いつの間にか笑顔であふれていた。

「淡路高校からのメッセージ、しっかりと受け取りました。淡路島の皆さんのように、家族と手を取り合い、周りの人と支え合いながら困難を乗り越え、将来の夢に向かって頑張っていきたい。そう話すマウン・チョー・コーさん(16)さんの言葉には、復興に向けた強い意気込み、頼もしささえを感じた。

海を越えて、ミャンマーに届いた淡路高校の生徒たちの思い。災害を乗り越え、力強く歩み出した被災地との間に、一つの温かいきずなが生まれた。



メッセージの届け先となったラプタは、ミャンマー国内で最も大きな被害を受けた都市の一つ

「淡路高校からのメッセージに元気が出ました」と、ラプタ第一高校のマウンさん(中央)



2008年度「防災と心のケア」を履修した淡路高校の生徒と森先生(右)



奨学制度によって学校に通えるようになり、村には子どもたちの笑顔が増えた

### 地雷の恐怖から村人を守る

1990年代、数十年にわたる内戦が終結し、復興に向かって歩み出したカンボジア。しかし、一步一步、着実に発展する都市部とは対照的に、地方は現在も多くの地雷が残り、開発から取り残された状態にある。昨年度だけで、地雷の犠牲者は266人※1。数年前と比べると半数近くにまで減少したが、地雷埋設地域にはいまだ貧困層が多く、国家の重要課題にもなっている。

NPO法人テラ・ルネッサンスがJICA基金を活用して支援する、バットンバン州カムリエン郡オッチャンボック村もその一つ。同州を含むカンボジア北西部のタイ国境地帯は、内戦が最後まで続いた地域。クメール・ルージュ※2の支配地域でもあったことから、地雷の撤去が遅れ、今でもおびただしい数の地雷が埋められている。

「人々は、村に地雷があることを誰よりもよく知っています。でも、ほかに住

テラ・ルネッサンスの自己資金から融資を受け、キャッサバをはじめとする農作物の栽培や家畜の飼育などを行った。「悪天候による不作の影響もありましたが、村人たちの意識も高く、返済状況は順調です」と江角さんは言う。

また村銀行では、毎月10000リエル（約0.25ドル）を各家庭から集め、健康保険として活用している。ここから、住民組織のメンバーの病気やけがなどの治療費、死亡したときの葬式費用などが支払われることになっている。自分の貯蓄が、村の誰かのために使われる。ポル・ポト時代の傷跡が残るカンボジアの村に、村銀行を通じて、助け合いの精神が育ちつつある。

さらに、住民組織では学校に行けない子どもたちのために奨学制度を設置。制服や文房具を支給している。この制度により、これまで、30人が学校に行けるようになった。うち2人は、以前は親がいくら言っても学校に行こうとしなかった。「おそらく制服や文房具がなければ、学校へ行くのが恥ずかしい」という思いがあったのだと思います」と、住民組織の副リーダー・トリー・ソークンさんはその効果をうれしそうに話す。

そして最近、新たな試みが始まった。村にため池10基を掘削し、魚の養殖プロジェクトを開始。4月初旬には稚魚をため池に放流し、7月ごろには販売を開始する予定だ。江角さんは、「魚は、タ



## 地雷が埋められた地域を救う村落開発を

内戦中に埋められた地雷が、いまだ貧しさの根源となっているカンボジア・バットンバン州。一日も早く、人々が貧困から脱却できるよう、NPO法人テラ・ルネッサンスは住民の生活向上支援を続けている。

住民組織の取り組みは、村人たちの話し合いによって決まる



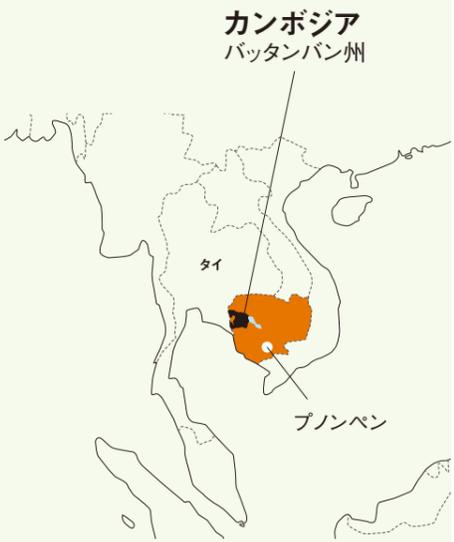
イにも輸出できるほど市場の幅が広い。順調にいけば、かなりの副収入が期待できるのでは」と展望を述べる。それ以外にも、有機農業やキノコ栽培などのワークショップを行い、村の自立に向けた方法を模索している。

「すぐに手を差し伸べるようなことはしない。基本的には、住民組織のメンバーが話し合い、問題を解決していく姿勢が大切だと考えています」と江角さん。地雷の恐怖から抜け出し、明るい未来に向けて村人たちは力強く歩み始めている。

※1 2009年4月、カンボジア地雷対策センター発表。  
※2 正式名称はカンボジア共産党。ポル・ポトを指導者とする反政府組織。



現地の地雷撤去団体のスタッフと、地雷に関する情報交換をする江角さん(左)。地雷埋設地域の支援を安全に行う上で重要な業務の一つだ



む場所がないのです」と、カンボジアでプロジェクトを統括する江角泰さん(えすみた)は話す。しかし、どの場所に地雷が眠っているかは、誰にも分からない。毎日が、恐怖と隣り合わせの生活。耕作中に、地雷を踏んでしまう人もいたという。

地雷による事故を確実に減らし、村人たちの生活向上につなげるためにはどうしたらよいか。江角さんたちは、地雷撤去作業と同時に、地雷埋設地域の村落開発に焦点を当てた協力を開始。住民組織を通じて村が丸となり、地雷被害者を持続的にサポートしていくための仕組みづくりを進めている。

### 地雷埋設地域に持続的な生活向上を

まず住民組織が導入したのが、マイクロレジット制度。「村銀行」を設立し、貧困層の家庭に小額の資金を融資するシステムだ。昨年10月から3月にかけて、住民組織のメンバーである100家族のうち、90家族がJICA基金、10家族が



ため池の状態を確認する村銀行の担当者。10家族でため池1基を管理する

### あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

#### 寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

#### 寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp>

文 = 北澤 由紀子 (JICA広報室)

# 北澤豪さん “パワー”に触れる

飛行機のタラップを抜けて首都ダッカの空港に降り立つと、フワとした熱気が身を包む。  
国土を3本の大河が縦断するバングラデシュ。雨期にはサイクロンや洪水被害が相次ぐが、乾期はまったく異なった二面を見せる。  
乾期も終わりを告げつつある3月中旬、元サッカー日本代表であり、JICAオフィシャルサポーターを務める北澤豪さんがバングラデシュを訪問した。



(上) オールドダッカの街中で、ごみ収集の様子を眺めながら、環境教育に取り組む隊員とJICA職員の話に聞き入る北澤さん  
(左) 「バングラデシュの生徒たちにとって一番効果があるのは、コーチが自らプールに入って泳ぎ続けること」と北澤さんに話す隊員たち



洪水の危険地域として指定されているチッタゴン近くの村では、日本の協力により住民が洪水時に避難するサイクロンシェルターが建設された。通常は小学校として使われている施設を訪問すると、生徒たちからの大歓迎を受けた ©KTP

## 女性たちの「家庭を守る力」

つすらと茶色く乾いた空気に包まれる土地の様子とは対照的に、バングラデシュ女性が着るサロワカと呼ばれる服はともカラフルだ。到着翌日に北澤豪さんが訪れたオールドダッカの街の片隅では、ちょうど収集車が家庭ごみを集めているところだった。そこに、サロワカを着た母親に促されるように子どもたちが列を成し、バケツいっぱいにたまったごみを持つてくる。

人口の急増と急速な経済発展によって年々深刻化するダッカの廃棄物問題を解決するため、JICAは「ダッカ市廃棄物管理強化プロジェクト」を実施している。プロジェクトでは、「グリーン・ダッカ」を目指し、住民参加による廃棄物収集の改善に向けた取り組みが行われており、市街のごみ問題が改善されつつあることを北澤さんは肌で感じた。

また、北澤さんはグラミン銀行※の融資を受ける農村女性たちが暮らすチッタゴン近くの村を訪問。毎週恒例となっている女性グループの返済式に参加した後、メンバーの女性宅を訪れた。「グラミン銀行がなかったら今の生活はなかったわ」。そう話す彼女の家はすでに乾燥させた家畜のふんを調理の燃料にしているが、居間を見れば立派なテレビや扇風機

がある。また、グラミン銀行から教育ローンを受けて息子を大学まで通わせた女性もいる。  
「女性は夢を追うだけでなく、きちんと現実を見ながら家族を支える術を知っているんだね」。北澤さんは、地方の小さな農村、それも女性たちが自らのパワーで成功を生み出していることがとても印象的だったという。



(上) 北澤さんから贈られた絵本をベンガル語に訳して読む隊員の声に真剣に耳を傾ける子どもたち ©KTP  
(下) サッカー教室では、ゲームも交えて練習。子どもたちは楽しみながら一つ一つ技術を身に付けていく ©KTP

## スポーツを通じて 将来に想いをほせる

滞在中、北澤さんはスポーツエリートを育成するバングラデシュ国立スポーツ学院を訪問し、水泳やテニスの指導に当たる3人の青年海外協力隊員の活動を視察。生活習慣や文化の異なる中で、より良い指導方法を模索し日々奮闘する隊員たちにエ

ールを送った。  
視察後、北澤さんは、「バングラデシュのすごいところは、何といても人の多様性と生命力。今すぐできることと将来できることを見極め、長期的な展望に立って人材を育成することが必要だし、その一翼を日本が担えるのなら、それはとても素晴らしい貢献だと思う。あとは施設面を整備していけばベストですね」

と話していた。  
今回の訪問の終盤には、北澤さんのサッカー教室がダッカ日本人学校で開かれた。これまで開発途上国で数多くのサッカー教室を開いてきた北澤さんだが、今回は、いつもとはかなり趣が異なるものだった。というのは、日本人学校に通う日本人の子どもたち、そして近くの村の子やNGOの施設で生活する元ストリー

トチルドレンなどバングラデシュの子どもたち約50人が参加する教室となったからだ。  
「説明は一度しかないからね」という言葉とともに始まった北澤さんの話を、一言も聞き漏らすまいと耳を傾ける子どもたちのまなざしはとて真剣だ。続いて行われたボールのパス練習では、靴を履く子とはだしの子がボールをパスし合っている。「素足でボールを蹴ってけがをしないだろうか」と、周囲の日本人はハラハラしながら見守るが、当の子どもたちは器用にボールをさばく。そして、試合が始まれば、国籍の違いや靴の有無などまったく関係のない真剣勝負となった。

閉会式で北澤さんは、自作の「Dunaと魔法のスパイク」という絵本を子どもたちにプレゼント。チームワークが大切なんだよ、とベンガル語に訳して絵本を説明する隊員の話聞いた子どもたちは、記念撮影で自然と肩を抱き合い笑顔浮かべていた。  
「バングラデシュの子どもたちの学ぼうとする意欲はすごい。一度教えられたことは2度目のチャレンジに必ず生かしている。このチャンスに逃さない気持ちがあれば、バングラデシュはきっと良くなっていくはず」と北澤さん。バングラデシュの人々のパワーにその可能性を感じた滞在となったようだ。

※1990年代に日本はグラミン銀行に対する資金協力を実施。2001年の事後評価によれば、グラミン銀行のマイクロクレジット(小額融資)を利用した多くの住民の生活が向上したといわれている。

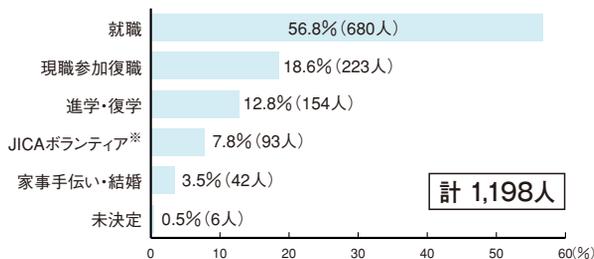
# Q 青年海外協力隊員は 途上国での活動を終えた後、 どのような進路を歩んでいるの?

毎年、開発途上国で貴重な経験を積んだ約1,200人の青年海外協力隊や日系社会青年ボランティアたちが日本に帰国している。  
気になる帰国隊員の進路と、JICAの進路支援とは。



ブラジルでの日系社会青年ボランティアの経験(上)をもとに、現在は出稼ぎ日系ブラジル人の子どもたちが通う小学校で、日本語学級の講師を務める帰国ボランティア

## ◆平成18年度 青年海外協力隊・日系社会青年ボランティア 進路状況



(注)平成18年4月1日～平成19年3月31日までの帰国者  
※短期ボランティア83人、シニア海外ボランティア6人など

JICA青年海外協力隊事務局  
帰国ボランティア支援課

### 浦山 友里恵

PROFILE  
民間企業秘書室を経て、1993年に  
社会人採用。研修員受入事業、ボラ  
ンティア事業など主に国内業務に携  
わる。2007年8月より現職。



## 「ボランティアの経験は、どの道に進んでも、 必ず大きな財産となるはずです」

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

帰国後の進路を不安視する声も聞かれますが、仕事もボランティア活動も、目標と熱意、創意工夫、自己管理能力、コミュニケーション能力など重要なことは同じ。これらを踏まえて活動に取り組めば、それは帰国後にもつながるはずです。

「変わる、つながる、私の未来」  
JICAボランティア、OB・OGストーリー」



<http://www.jica.go.jp/activities/kikoku/>

帰国ボランティア で 検索

JICAの進路支援やOB/OGの経験談はこちらから!

JICAボランティアのつ。

ページをご覧ください。

JICAでは、帰国者の進路開拓のためにさまざまな支援を行っています。「就職」「進学」「国際協力」などテーマ別に毎月実施されている「進路開拓セミナー」をはじめ、各種研修では、自己分析や進路情報の収集を助けるとともに、社会で活躍する隊員OB/OGとの交流の機会を提供しています。また、全国に配置されている25人の専門カウンセラーが、随時、進路相談を受け付けています。さらに、帰国ボランティア専用のホームページなどを通じて、企業・団体からの人材募集の情報や、研修・セミナーの案内なども入手できます。

01

国際理解教材  
「集まれ！地球の教室」が完成

JICAは2007年4月より1年間、朝日小学生新聞で全51回にわたる連載コラム「集まれ！地球の教室」を掲載してきました。このコラムは、世界の国々や教育、環境、保健医療など開発途上国が抱える多くの課題について、クイズやワークシートを使って分かりやすく説明したもので、教育関係者などから大きな反響があり、連載終了後も問い合わせが相次いでいます。

そこで今回、全コラムをまとめた冊子を発行することになりました。現地の情報やデータも豊富に取りそろえられ、小中学校の国際理解教育(開発教育)の副読本として活用できるものになっています。

また、学校に行けない途上国の子どもたちの現状や国際協力についてイラストで分かりやすく解説したパンフレット「学校に行きたい!」や、マンガで途上国のさまざまな問題を学ぶことのできる「壁新聞」など、ほかにもたくさん国際理解教育の教材を無料で配布・貸し出ししています。ぜひご一読・ご活用ください。

問：JICA地球ひろば市民参加協力促進課

TEL：03-3400-7254



世界の課題、国際協力について分かりやすく説明しています

02

青年海外協力隊  
16年ぶりにスーダンへ派遣再開

1993年以降見合わせていたスーダンへの青年海外協力隊の派遣が16年ぶりに再開され、3月末、短期隊員の岡田晃範<sup>あきのり</sup>さんが現地に向けて出発しました。

内戦悪化の影響を受け、JICAは93年にスーダン事務所を閉鎖、協力隊の派遣も中止しました。その後2005年に南北包括和平合意が結ばれたことから、07年に駐在員事務所を開設。以降、「平和の定着」を目指し、保健・衛生、水、教育、職業訓練、

インフラなどを重点分野に支援を行っています。

岡田さんには、今年1月まで隊員としてヨルダンで活動していた経験があります。スーダンへの派遣期間は6カ月。首都ハルツームの職業訓練センターで、溶接技術の指導を行うほか、今後のボランティア拡充を視野に入れ、現地の技術レベルなども調査する予定です。

03

コンボで奏でられた平和のハーモニー

4月13日、コンボ共和国の首都プリシュティナで、JICA研修参加者の親睦<sup>しんぼく</sup>とJICA事業への支援を目的に設立された「JICAコンボ帰国研修員同窓会」の総会が開かれました。

1990年代のユーゴスラビア紛争に巻き込まれ、北大西洋条約機構(NATO)軍によるセルビア空爆や国連統治を経て、2008年2月に独立を果たしたコンボ。JICAは02年より、コンボへの人材育成支援として、環境やエネルギーなどさまざまな分野で、日本での研修を実施しています。

総会後には、平和の定着への願いを込めてコンボ・フィルハーモニー交響楽団の定期

演奏会が行われ、同楽団の常任指揮者・柳澤寿男さんが、総会の参加者全員を招待しました。

演奏会に

は、団員不足の同楽団を助けるため、隣国マケドニアから約20人の演奏者がエキストラとして参加。その際には、01年に日本の無償資金協力によってマケドニアに供与された楽器が使われました。



定期演奏会で指揮する柳澤さん

# イチャオシ!

BOOK

## 『僕が見たアフガニスタン Afghan Blue』

戦禍、飢餓、極寒という過酷な状況にありながらも、懸命に生きる人々の笑顔や優しさ、強さがあるアフガニスタン。本書は、1998〜2008年までの10年間、刻々と変わる不安定な情勢下で独自取材を粘り強く続けてきた報道写真家の久保田弘信氏が、その希望に満ちた人々のありのままの姿をとらえた写真集。アフガニスタンに対しJICAは、難民の保護、復興支援、平和構築など、さまざまな協力を行っている。「アフガニスタンの人たちの現在、そして未来に思いをはせていただきたい」―緒方貞子理事長推薦の一冊。

この本を  
3人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ



久保田 弘信 写真  
虹有社  
2,100円(税込)

BOOK

## 『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』

大正から昭和の前半にかけて、シベリア、満州、台湾、支那(中国)、フランス領インドシナ(ベトナム、ラオス、カンボジア)、南洋群島などを放浪し、海外在住の日本人の暮らしや現地の民族・風俗などを旅行記や小説にして世に送り出した作家、安藤盛。本書は、安藤の人生をたどりつつ、彼が海外で出会った「からゆきさん」の嘆きと望郷の声を紹介している。「からゆきさん」とは、19世紀後半にアジア各国に渡り、娼婦として働いた日本人女性。正当な女性とみなされず、安藤自身も最初は醜業婦と「からゆきさん」をさげすんでいたが、旅を通じて彼女たちの心に触れ、作品では一人の人間として描いている。



青木 澄夫 著  
風媒社  
1,050円(税込)

この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

EVENT

## 海のエジプト展

～海底からよみがえる、古代都市アレクサンドリアの至宝～

約2000年前、かのクレオパトラが愛したといわれるエジプト第2の都市アレクサンドリア。「海のエジプト展」は、地中海に面した海底遺跡から発掘された至宝を紹介する国際巡回展。約5メートルのファラオの彫像やヒエログリフが刻まれたステラ(古代エジプト文字が刻まれた石碑)など、約490点が日本で初公開される。

会 期：6月27日(土)～9月23日(水・祝)9時半～18時(入場は17時まで)  
会 場：パシフィコ横浜・ホールD(神奈川県横浜市)  
参加費：大人2,300円、高校生1,300円、小中学生800円(前売り券・団体券あり)  
問：展覧会ダイヤル  
TEL：0570-060-060  
URL：http://www.asahi.com/egypt/

MOVIE

ごみ捨て場で生きる人々を描いたドキュメンタリー

## 『BASURA バスーラ』

フィリピン・マニラ近郊の巨大なごみ捨て場「スモーキーマウンテン」。“貧困の象徴”ともされるこのごみ捨て場には、40年以上前からごみを拾って生計を立てる人々が暮らしていた。ところが1995年、フィリピン政府により閉鎖。人々は、スモーキーマウンテンのすぐそばに建てられた仮設住宅に移り住むこととなった。そんな彼らを訪ねた四ノ宮浩監督が見たものは、新たに作られたごみ捨て場で以前と変わらぬ生活を続けている人々の姿だった。95年からスモーキーマウンテンを幾度となく訪れ、貧困と飢餓の中を生きる人々を見つめてきた四ノ宮浩監督。『忘れられた子供たち』『神の子たち』に続くドキュメンタリー映画の第3作。



映画「BASURA バスーラ」より

2009年/日本/105分  
監督・編集：四ノ宮浩  
撮影：大廣康夫  
公開：6月下旬から東京都写真美術館にてロードショー  
URL：http://basura-movie.com/



地球ギャラリー vol.09

# Zambia

【ザンビア】  
文・写真＝飯塚 明夫（写真家）

## 「隣人カ」 コンパウンドの

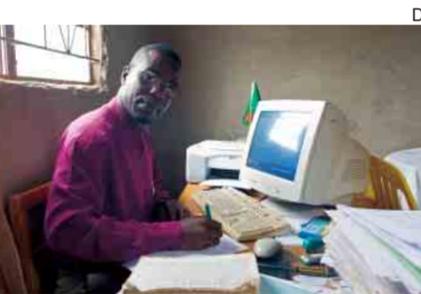
軒先で衣服を売ることこの女性（左から2人目）は南アフリカから移住してきた。「何かと隣近所に助けられている」と笑う



市場の衛生状態は決して良いとはいえない。日用品は南アフリカ製と中国製が圧倒的に多い



母親たちの井戸端会議。日常の会話はコミュニティの潤滑油



D.日曜日のミサの準備をするマクソン神父。信者からのさまざまな相談に乗る  
E.ミサに来た子どもたち。教会では少年少女の防犯意識の向上にも力を入れる

19年ぶりに訪ねたザンビアの首都ルサカは、南アフリカ共和国など外国の資本が入り、大きな変化を遂げていた。空港からルサカに続く幹線道路沿いには、巨大ショッピングモールが建ち、市内にはファストフードの店が並ぶ。携帯電話は都市生活者の必需品だ。

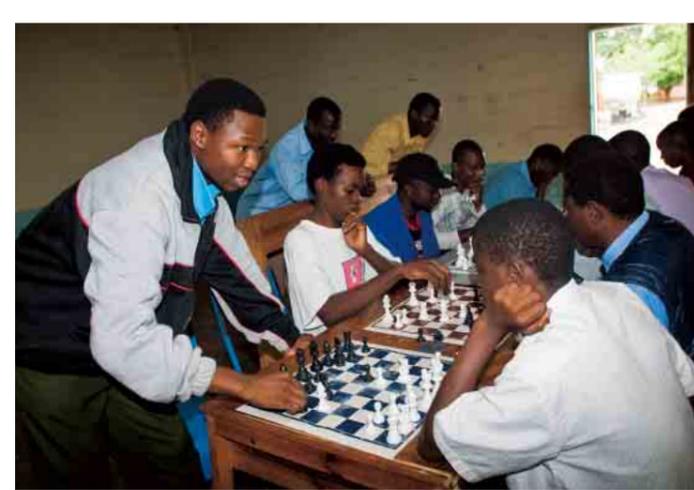
ルサカは私が青年海外協力隊時代に赴任した地。様変わりした町に少し戸惑いを覚えた私は、コンパウンドを訪ねてみた。コンパウンドとは、大都市郊外に広がる低所得者の居住区で、隊員時代に慣れ親しんだ場所でもある。

ここには、当時と変わらぬ時間と空気が流れていた。隣人同士の助け合いの精神「隣人力」が今も息づく。日々の平和を願いさまざまな人々が、暮らしやすい地域づくりのため

の隣人力を發揮していた。

カウンダ・コンパウンドの神父、マクソン・マムドゥさん（42歳）もその一人。彼は布教活動だけでなく、防犯のために隣組をつくり、夜間パトロールを行っている。隣人同士が協力して泥棒を捕まえたこともあるという。「人間は本来、一つの家族として助け合う生き物。コンパウンドは大きな家族であり、助け合いの精神がある」と話す。

大学生のロドリック・チョンガさん（24歳）は、土曜日の午後、コンパウンドの市民ホールでチェスを教えている。仲間と結成したチェス・クラブ。約50人の会員の中には、10代の少年も多い。「チェスに熱中することで、非行に走る少年を少なくしたい」というのがクラブを作った理由の一つだ。



A. 幹線道路沿いのショッピングモール。新たに数カ所で建設が進んでいる  
B. チェスを教えるロドリックさん（左）。照明設備がなく日没とともに教室は終了する  
C. 広場でサッカーを楽しむ若者たち。この地域では仕事が少なく生活は不安定だ



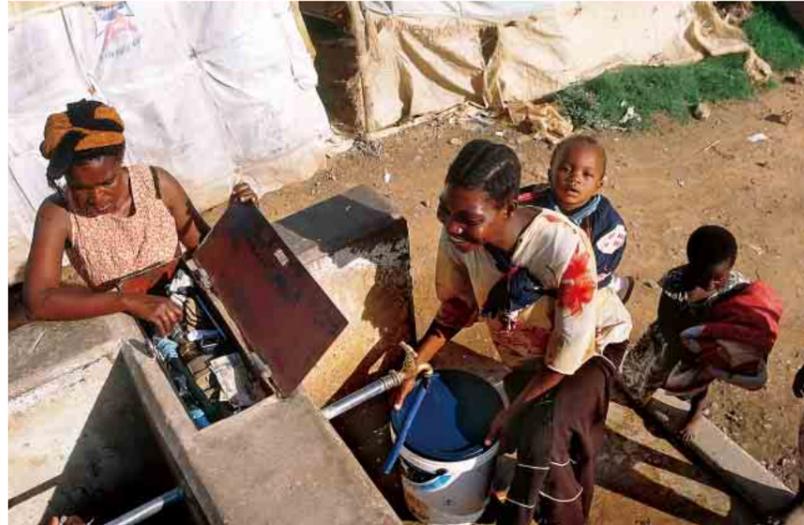
F.コンパウンドの遠景。ルサカ郊外には合わせて24カ所のコンパウンドが広がる



H.医療施設で薬の配布を手伝う治療サポーター



G.カニヤマ・コンパウンドの治療サポーターの一人(中央)が、結核患者に病状や服薬の仕方などを説明する



I.水場を管理する女性(左)。一家族が持ち帰る量は1日20リットルまで



水場の子どもたち。水くみは重労働だが、それを担うのは主に女性や子どもたちだ

地球ギャラリー vol.09

F.コンパウンドの遠景。ルサカ郊外には合わせて24カ所のコンパウンドが広がる

G.カニヤマ・コンパウンドの治療サポーターの一人(中央)が、結核患者に病状や服薬の仕方などを説明する

H.医療施設で薬の配布を手伝う治療サポーター

I.水場を管理する女性(左)。一家族が持ち帰る量は1日20リットルまで

カウンダ・コンパウンドの隣にはウゴンベ・コンパウンドがある。ウゴンベとは、現地語で「牛」の意味。ここは昔、牛の放牧地だったという。私が日本人だと知ると、周りにいた人たちが日本の協力でできた水場に案内してくれた。

56カ所あるウゴンベの水場はすべて管理人付きで、使用料の徴収や掃除など維持管理を行っている。管理人は1週間で次の水場に移動する。長く居ると住民と仲良くなり過ぎ、いろいろな弊害が出てしまうからだ。これは「困った隣人力」の発揮を防ぐ工夫なのだろう。

次に訪ねたカニヤマ・コンパウンドは、人口約20万人、ルサカ最大のコンパウンドだ。ここで日本のNGO、AMDA社会開発機構(AMDA—MINDS)が、2008年よりJICAの草の根技術協力を通じて、結核やエイズ患者の治療を支援している。

この取り組みで重要な役割を担うのが、治療サポーターと呼ばれる地元ボランティア。日ごろから患者宅を訪問し、服薬の手助けや精神面でのケアに努めるなど、感染症と闘う人々の大きな支えとなっている。

ここでも地元民の「隣人力」が遺憾なく発揮されていると実感した。

ザンビアアンゴラに三原流を築し、  
南部アフリカを流れるザンベジ川。  
ワイルドサファリで  
楽しむ観光客も多い。



世界三大滝の一つ、ビクトリア・フォールズ。  
地元の人からは現地語で  
「雷鳴の轟く水煙」と呼ばれている。  
1989年、世界遺産登録。



首都：ルサカ

面積：75万2,610km<sup>2</sup> (日本の約2倍)

人口：1,192万人 (2007年)

公用語：英語

宗教：キリスト教徒約80%、そのほかイスラム教、ヒンドゥー教、  
伝統宗教

1人当たり国民総所得 (GNI)：770ドル (07年)

経路：日本からの直行便はなく、南アフリカ共和国やロンドン  
経由が一般的

通貨：ザンビア・クワチャ (ZMK)

1ZMK=約0.02円 (09年4月現在)

気候：北部は亜熱帯性気候、南部はサバナ気候に属し、涼しい乾  
期 (5~8月)、暑い乾期 (9~11月)、雨期 (12~4月) に分かれる。



世界有数の金銅の産地として知られ、地下に眠る豊富な  
金銅の資源は、国の経済を支えている。



国内にある19の国立公園と  
23の動物保護区には、  
アフリカを代表するゾウ、カバ、  
キリン、シマウマなど  
多くの動物が生息する。

## JICAの活動 in ザンビア

### 安定した経済発展を 後押しするために

2030年までに中所得国入りを目指すザンビア。  
JICAは、経済成長と貧困削減を後押しするため、  
そのカギとなる産業の多角化や投資環境の整備  
など国の基盤強化を支援している。



ハンドポンプの修理方法を  
指導。JICAは地方の給水  
施設の運営・維持管理体  
制の改善にも協力している



投資環境整備の支援では、ザン  
ビア開発庁の職員らがマレーシ  
アの工業団地を訪問した

アフリカの中でも比較的政・経  
済が安定し、民主化が進んでいる  
ザンビア。アンゴラやコンゴ民主共和  
国、ルワンダなど周辺国の和平活動  
を支援すると同時に、主要産業であ  
る銅産業や農業を含む産業の多角  
化に取り組み、2007年の経済成長  
率は6.3%と高い伸びを示している。  
しかし、08年末の金融危機の影響で、  
銅の価格は最高値の3分の1にまで  
落ち込み、経済成長率は5.8%に後  
退している。

JICAはこうした状況の中で、国際  
価格が変動しやすい鉱業に依存し過  
ぎず、ザンビアがより安定的に成長し  
ていくための支援を行っている。

産業の多角化を後押しする支援で

は、産業の集積地であり南部アフリカ  
地域の結節点となる首都ルサカの交  
通や上下水道の整備など都市開発  
を計画的に進めるための調査を実施。  
また、電化率がわずか3%という状況  
に置かれている地方の人々に電気を  
供給するために、円借款を通じて配  
電網を整備するとともに、小水力発  
電設備の導入を支援していく計画に  
なっている。このザンビアに対する円  
借款は、実に17年ぶりのことだ。

さらに、外国投資をもとに工業化に  
成功し、目覚ましい発展を遂げたマレ  
ーシアと協力して投資環境整備に取り  
組んだ。その結果、マレーシアやイ  
ンドによる投資が決定されつつある。  
加えて、自立した国づくりには不可欠な

人材の育成や制度構築のため、地  
方行政の能力強化も図っている。

一方で、いまだザンビアには農村  
部を中心に貧困層が多い。JICAは、  
農業普及員を育成・支援し、開発から  
取り残されている小農の自立を促す  
ため、農村開発モデルの策定に協力  
している。



農村開発モデル策定支援には、アジアでの開発  
経験が生かされている



シマの製造風景。トウモロ  
コシ粉に水を加え、火にか  
けながら練り上げれば完成  
だ。練り上げるには結構な  
力がいる

☆サツマイモの代わりにドライコーンを使  
ってもOK。ぜひ一度お試しを！

写真：佐々木信江 (青年海外協力隊)

- 1. サツマイモの皮をむき、塩ゆでする。
  - 2. ゆで上がった粉ふき状にし、少量の  
水で溶いたピーナツバターをかける。
  - 3. 鍋の中で半マッシュ状態になる程度に  
混ぜて出来上がり。
- 【材料】  
サツマイモ／ピーナツバター／塩少々／重  
曹少々

- 【作り方】
  - 1. ホウレンソウを千切りか粗めのみじん  
切りにして塩ゆで。
  - 2. 玉ネギとトマトを1センチ角に切る。
  - 3. 洗皮を除いたピーナツを粉末状に。
  - 4. 1の中に2と3、塩、重曹を入れて15  
分ほどゆでる。
  - 5. 木べらでかき混ぜたら完成。
- ☆どろっとしたピーナツが口あたり良く、  
野菜嫌いな人にもオススメ。シマはもちろ  
んご飯と一緒に、また酒のさかなとして  
も相性がいい。

- ヘカンドーロナンシャーバ
- 【材料】  
ホウレンソウ (白菜、キャベツ、ほかの葉物  
でも可)。ザンビアではカボチャの葉が主  
流)／ピーナツ／玉ネギ1個／トマト2個  
／塩少々／重曹少々

- 【作り方】
  - 1. ホウレンソウを千切りか粗めのみじん  
切りにして塩ゆで。
  - 2. 玉ネギとトマトを1センチ角に切る。
  - 3. 洗皮を除いたピーナツを粉末状に。
  - 4. 1の中に2と3、塩、重曹を入れて15  
分ほどゆでる。
  - 5. 木べらでかき混ぜたら完成。
- ☆どろっとしたピーナツが口あたり良く、  
野菜嫌いな人にもオススメ。シマはもちろ  
んご飯と一緒に、また酒のさかなとして  
も相性がいい。

日本ではザンビア料理を食べられる店を  
見つけるのは難しい。ならば自宅で、ザンビ  
ア人が大好きなグラントナツツ(ピーナツ)  
を使った料理に挑戦してみよう。

ザンビアの主食はメイズというトウモロ  
コシの粉から作られる「シマ」。そのおかず  
となるのが、ザンビアでよく食べられる菜  
葉のレイブ(からし菜の一種)やカボチャの  
葉、カレンブラといわれるサツマイモの葉、  
キャベツ、魚肉類、豆など。味付けは至って  
シンプルで、油と塩のみ。玉ネギやトマトを  
入れるとうま味が増す。



フィサン



カンドーロナンシャーバ

ザンビア料理  
シマの付け合わせは  
グラントナツツで！

■「3月号水特集へのコメント」香川県に住むわたしたちは毎年夏に水不足の心配をします。高知県の早明浦ダムを水源に香川用水を整備した現在でも、夏になると水不足が心配になります。その水が実は今、世界中で大きな問題になっていることを痛感しました。私たちの生活に欠かせない水、それは全ての人にとって欠かせない生命の源であることをあらためて考えたいと思いました。(香川県・51歳・男性・中学校教諭・工藤護)

■「3月号へのコメント」地球号の子どもたちを毎号楽しみにしています。中高生の心にきざまれた、他国への知識、気付きは一生を通して心に残り、人生の指針になると思います。益々世界の中で色々な事を考え、決めてゆかなければならない世代にとって知る事は理解する第一歩だと思います。(大阪府・60歳・女性・主婦・山内ます子)

■「4月号学校特集へのコメント」私たちは何も考えずに幼稚園に入園し、小・中学校に入學し、さらには高校・大学と進学し、勉強することが出来ます。日本では当たり前前には享受でき「教育」というシステムが、実はとても有り難いものなのだ(私はもう間に合いませんが)、今の小・中・高校生に知って欲しいと思いました。(大分県・33歳・女性・司書)

■「4月号へのコメント」「JICA's World」を読み終えた後、世界各地で平和な未来に向けて頑張っている多くの人達の姿を知り、感動しました。私はまだ高校生で国際協力の中身を深くは知りませんが、今回の本に出会えた事がきっかけとなり、これからは一人の日本人として世界の平和の意義を理解し、JICAのプログラム等にも参加してみたいと思います。(兵庫県・17歳・女性・高校生)

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2009年7月15日

Email: [jica@idj.co.jp](mailto:jica@idj.co.jp)  
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- (日) エジプト・ナツメヤシ
- (月) エジプト・スパイス&ハーブ
- (火) 書籍『僕が見たアフガニスタン Afghan Blue』(p30参照)
- (水) 書籍『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』(p30参照)
- (木) 書籍『それでも、笑顔で生きていく。～私が出会ったHIV/エイズの子どもたち～』(p40参照)

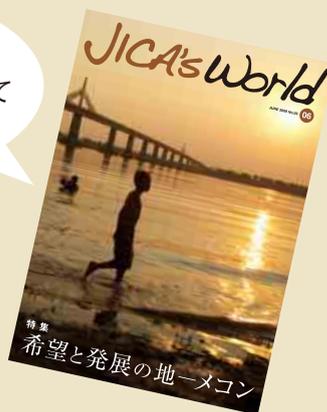


本誌をご希望の場合は  
送料ご負担(200円)にて  
お送りいたします。

申込方法

氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)  
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル  
TEL 03-3584-2191  
FAX 03-3582-5745  
Email [order@idj.co.jp](mailto:order@idj.co.jp)  
支払方法 「ゆうメール」の着払いとなりますので、本誌と引き替えに200円をお支払いください。



次号予告 (2009年7月1日発行予定)

## はじめてみよう! 国際協力

私たち一人一人にできる国際協力を紹介します。

# JICA's World

JUNE 2009 No.09

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒151-8558 東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインズタワー内  
TEL: 03-5352-5433 FAX: 03-5352-5032 Email: [jicagap-opinion@jica.go.jp](mailto:jicagap-opinion@jica.go.jp) URL: <http://www.jica.go.jp/>

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



photo by Otsuka Masataka



## エジプトの香りを日本の食卓へ

古代文明の発祥地であり、6000年の歴史を誇るエジプト。そのエジプトの“香り”が、日本にも運ばれていることをご存じだろうか。

エジプト料理には、スパイスやハーブがふんだんに使われる。あちこちで量り売りされ、ハーブティー、漢方薬としても人気だ。それは数千年前から人々の生活に欠かせない、エジプト人の“アイデンティティー”の一部となっている。

実は日本にも、多くのスパイスやハーブがエジプトから輸入されている。だが、他国のものとブレンドされたりして「エジプト産」であることが分からず、エジプト産品そのものの価値が見失われてきた。

その隠された魅力に目を付けたのが、(株)FAR EASTの佐々木敏行社長。JICAが日本貿易振興機構(ジェトロ)と協働で支援するエジプト輸出振興センターとのコラボレーションにより、エジプトに未知なる可能性を見出した。

「日本の消費者に、エジプトの食材は質が高いだけでなく『おしゃれなんだ』と感じてもらいたい」。そこで開発されたのが、黒をベースにしたスティックタイプの包装。「1~2回で使い切れる量。本来の香りを毎回楽しむことができます」。同じくエジプトの特産品であるナツメヤシの販売も開始した。

日本の食卓に、エジプトの古代の“香り”が少しずつ広がりつつある。



ナツメヤシの収穫に汗を流すエジプトの青年

問: (株) FAR EAST  
TEL: 042-973-2060  
FAX: 042-983-2252  
URL: <http://www.fareastinc.co.jp/>  
エジプトのスパイス&ハーブ、ナツメヤシ(デーツ)は全国の有名百貨店で販売。FAR EASTのホームページでも購入できる。

★スパイス&ハーブを2人の方に、ナツメヤシを3人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ→



MY  
ACTION

Vol. 09

その笑顔にたどり着くまで

佐々木 恭子

フジテレビアナウンサー

SASAKI KYOKO



©フジテレビ

## PROFILE

1972年兵庫県出身。1996年(株)フジテレビジョン入社。『情報プレゼンター とくダネ!』(99年4月～2009年3月)などでキャスターを務める。現在産休中。05～08年にかけて、インドネシア、マラウイ、パプアニューギニア、ガイアナを取材し、全国で報告会を実施。著書に『それでも、笑顔で生きていく。～私が出会ったHIV/エイズの子どもたち～』(扶桑社)。  
★この本を1人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ

FNSチャリティーキャンペーンの一環として、2005年スマトラ沖地震の半年後にインドネシアのバンダアチエを訪れました。本当に何もなく、一瞬でこんなふうになってしまうんだと…。初めて原爆ドームを見たときのような衝撃でした。でもそこには、家族を失っても、貧しくても、懸命に生きる人々の姿がありました。お客さんだからと言って、私たちに食事をふるまってくれたり、「こんな時でも人を気遣うことができるなんて」と、胸がいっぱいになりました。

06年からは、HIV/エイズをテーマに、マラウイ、パプアニューギニア、ガイアナを取材しました。必要最低限の医療ですら整備されておらず、もはや自分たちの力だけでは感染をコントロールできない状態。「人の死」が、あまりに身近に、たくさんあることがとてもショックでした。

それでもみんな明るくて、たくましいんです。助け合いながら、一生懸命生きてる。日本では感じたことのない、「人間同士のつながり」の深さを感じました。弟や妹の世話のために学校に行けなくても、「この子たちのために頑張るんだ」って。私は、これまで人のために生きるなんて考えたことがあったかと…。

一方で、そんな彼らのまぶしい笑顔が、悲しみとの合わせ鏡であるように思えてなりません。その笑顔にたどり着くまでは、本当に、本当に大変だったんだと思います。私は、彼らのためにも「伝え手」として、目に見えるものだけでなくその一歩奥にあるものを感じて、皆さんに伝えていくことが使命だと考えています。

マラウイでは、現場で奮闘している青年海外協力隊の活動も視察しました。そして、孤児院で活動する隊員

の言葉を聞いてはっとしました。

「まずは“そばにいる”ことが大切。一緒に遊んだり、話を聞いてあげたり。それだけでも違うんです」

彼らが自立していくためには、技術だけでなく、本当に長い目で、ゆっくとその国に根差した支援を行っていくことが大切なんですね。

どんな人でも、身近でできることはたくさんあると思います。ニュースを見て、途上国について関心を持つことから始めてもいい。フェアトレードショップに、ちょっと足を運んでみるのもいい。でも若い人には、思い切って外に飛び出してほしい。言葉だけでなく、肌で現実を感じることも大切だから。

私たち一人一人が、遠い国で起こっていること、そこで懸命に生きる人たちに思いをはせれば、世界は変わっていくのではないのでしょうか。

※このインタビューは、2009年3月に行われたものです。